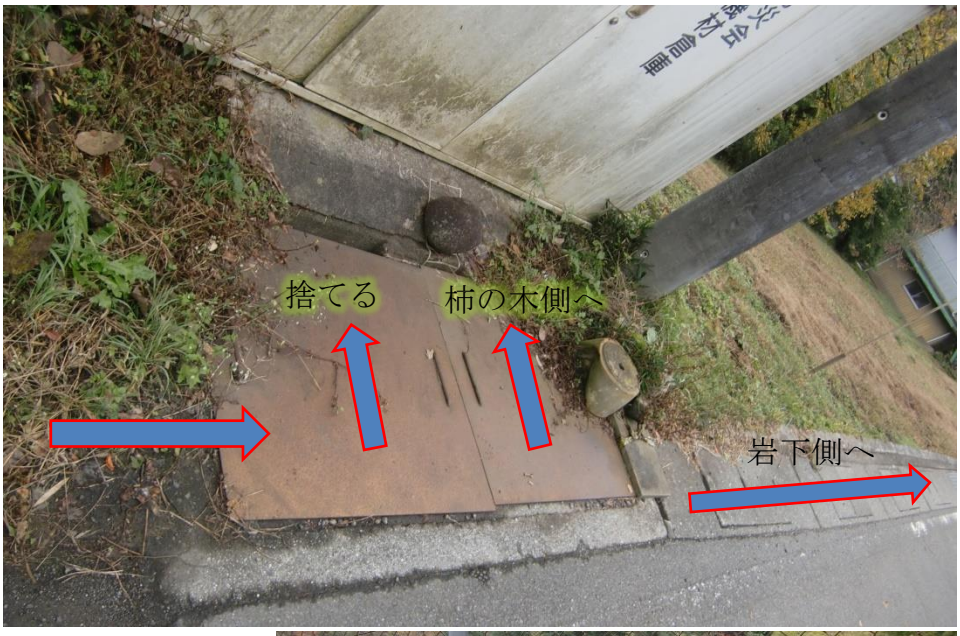
ここから二回目調査です。

47. 農業用水路

右の写真は、入組の防災倉庫の前です。ここで、上流から流れてきた農業用水は３方向に分かれます。そのまま岩下側に流れる水路と、浅利川をサイホンで越えて三共・柿の木側に流れる水路、そして、水の不要時に川に戻す水路の３つです。調査は取水口迄たどります。



48. 東京 EMC 大月サイト跡地

右の写真は、防災倉庫の上側にあった、東京 EMC 大月サイトの空地です。ここも、元々は水田だったそうです。

49. 県道の両側は景勝地

県道を強瀬ヶ滝に進みます。道の左が山を削った崖、右は深い谷、渓谷です。この辺も紅葉が綺麗な場所です。

50. 旧道は山道

この写真は、新道から山側を写した写真です。旧道は、山の上の平らな所を通っていたそうです。（破線は推測です）

51. 渓谷を渡る農業用水路

右の写真は、浅利川と宮の沢との合流点です。ここで農業用水路は、宮の沢を横断して、県道側に渡ってきます。鉄骨でできた水路橋です。勿論、以前は木で出来た水路でした。

52. 猿の出没

前頁の写真は、宮の沢橋付近です。最近この辺りでは、猿が目立つようになりました。調査日にも二匹の猿が、目前で、道路を横断して山に入って行きました。

私たちは、これから、宮の沢橋を渡り、子安神社前の Y 字路を左側に進み、宮の沢の水車小屋に向います。

53. 宮の沢（小沢）の水車小屋

右の写真は宮の沢の水車小屋跡に残されていた石臼を調べているところです。この宮の沢の水車小屋は、昭和 20 年代に、強瀬ヶ滝の水車小屋から移設したものだそうです。強瀬ヶ滝の水車小屋跡はこの後に調べますが、大水による被害が多かったので、こちらに移転したのだそうです。

宮の沢の水車小屋は、すぐ上流にある「宮の沢の滝」から水を引き、落差を利用して水車を回していたそうです。

写真の左側は、古地東（加藤進氏）の水田でした。今は地形が変わって、川が真ん中を流れていますが、昔は向うの崖に沿って端を流れていたそうです。現在は木が成長して日当たりが悪くなっていますが、昔は田圃をしていたくらいですから、樹木もなく、日当たりが良かったのだろうと推測されました。加藤進氏の話として、ここは、滝があり、水車小屋があり、田圃ありで、景色が良いので、バブルの頃に別荘地にしたいから売ってくれと言ってきた人もいたそうです。

右の写真も水車小屋の石臼です。先程の石臼は、米や麦・豆などを、粉にひくためのものですが、こちらは杵で突いて、糠をとって精米や精麦するための石臼です。

53-1　【宮の沢の滝】

宮の沢は別名小沢ともいうそうです。これは、浅利川を大川ないしは大沢と呼んでいたのに対しての名称だそうです。

下の写真は宮の沢の滝です。写真中央の滝の落口や滝壷を、上流で伐採し放置された樹木が、流されてきて蓋っているために綺麗には見えませんが、それらがなければ風光明媚なところです。また、中央の滝から右側に洞穴が続いています。

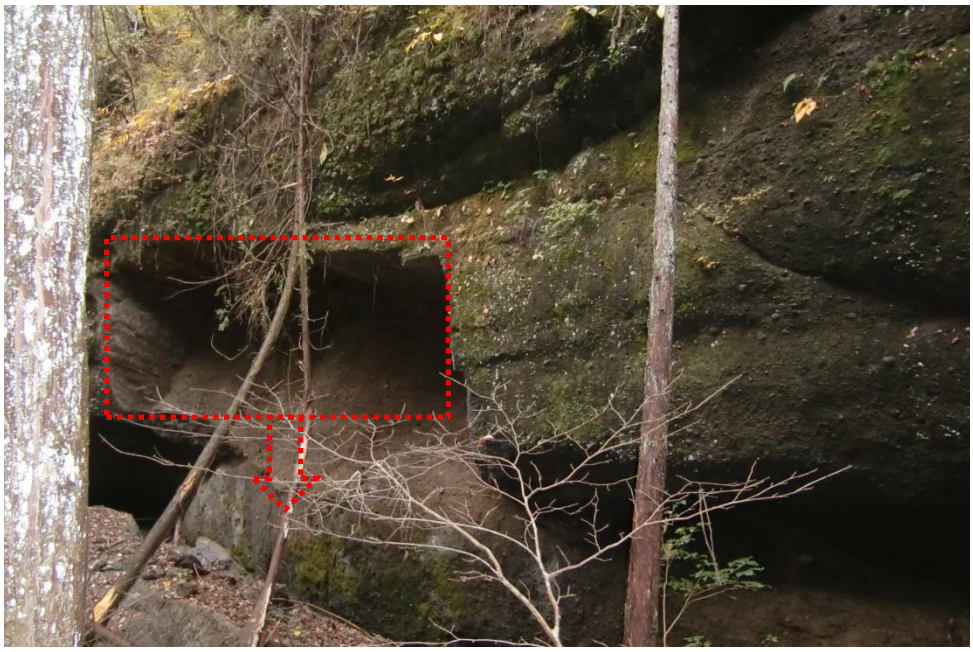
53-2　【こじき穴】

この洞穴ですが、昔（戦前の頃）乞食が住んでいたので、こじき穴と呼んでいるそうです。この乞食は、強瀬ヶ滝に水車小屋があった頃、水車小屋に盗みに入ったりもしたそうです。この宮の沢に水車小屋を移した頃には、いなくなったそうです。

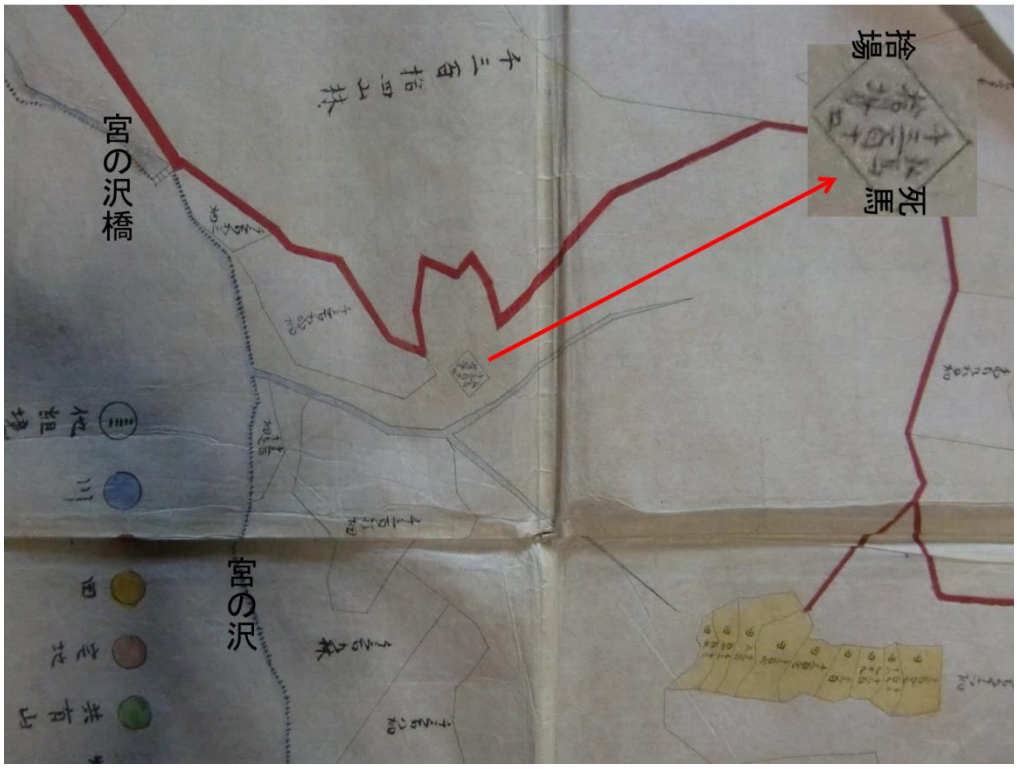
今は滝が崩れてしまったので有りませんが、崩れる前には、滝の裏側まで右側の洞穴が続いており、滝の裏側に行くことができたそうです。

現在は、横の洞穴も一部崩れてしまい、全体が小規模になってしまいました。

右写真の赤枠は、崩れた部分です。



54. 粗馬（死馬）捨場



右の絵図は岩下にある絵図の一部です。そこに“死馬捨場”が記載されています。

弱って農作業には使えなくなった馬を処分するのに、宮の沢橋の手前から、山道（図中の赤線）に入り、岩場の崖上から追い落として、西の桑畑付近の沢に落としたそうです。また、崖下で待っていた人は、死馬を解体し、肉は貴重なたんぱく源として利用し、骨は埋葬したそうです。また、熱が出た時に、馬の骨を煎じて飲むと効果がある、ということで、粗馬捨て場に探しに行ったことがあるそうです。

55. 農業用水の堰堤

道を戻ります。子安神社前の浅利川にある堰堤に行きます。右の写真は、入組の農業用水を取水している堰堤です。用水路は堰堤の右岸にあります。

この堰堤は三代目の堰堤だそうです。

右の写真は対岸（左岸）の岩です。赤い円で示したのが初代の堰堤跡です。岩に穴をあけ、ここに木材を差し込み、堰堤を造ったそうです。黄色の円で示したのが、二代目の堰堤跡です。業者が造ったもので、四角に整形した石を積み上げて造ったようです。

56. 高山（たかやま）の街灯跡

また道を戻り、強瀬ヶ滝に向かいます。ちなみに、強瀬ヶ滝とは、滝の名前であると共に地域の名称でもあります。

さて、県道から強瀬ヶ滝に分かれる道の左側に、こんもりとした小さな山があります。“高山”といいます。「子供の頃に、ここでよく遊んだ」と岩下は云いました。この“高山”の中腹に、コンクリート製の街灯跡があります。

古地東の話では、昭和 34 年頃に、源屋のおじさん達が中心になり、入組で設置した街灯だそうです。防犯と道案内が目的だったそうです。というのは、今は県道に沿って電柱が立てられ、その電柱に街灯がついていますが、当時は県道に電柱は無く、電柱は、強瀬ヶ滝の山を越え、浅利川を渡って、浄照寺に出るように、あったそうです。ですから街灯を燈すためには、電柱を立てなければいけなかったのだそうです。その後、街灯周囲の土が掘れて倒壊の恐れが出てきたのと、県道に沿って電柱が立てられるように

都留高前

土屋医院前

なったので、廃棄することにしたのだそうです。

この同じ街灯を大月で見つけました。大月二丁目の大橋屋横から都留高への通りに、二灯見つけました（前頁下の写真)。古地東の話では、高山の街灯は、大月から貰って設置したものだそうですから、同じものだと思います。また、都留高前のこの通りは、当時から大きく変わっていないことが推測できます。

57. 強瀬ヶ滝橋

右下の写真は、強瀬ヶ滝橋の銘板です。

57-1【強瀬ヶ滝】

強瀬ヶ滝橋のすぐ下流に強瀬ヶ滝があります。この強瀬ヶ滝も、浅利の名勝地として外せないものの一つです。下の写真は橋から写した強瀬ヶ滝ですが、この方角では、滝の素晴らしさを伝えることは難しいです。

下から見るためには、下流の養奈良橋辺りか、岩下辺りから川に降りて、川沿いに上らなければいけませんが、途中に、胸まで水深があるところもあるそうで、簡単ではありません。あとは、切り立った崖を降りる方法もあることはあるそうですが・・・・・・いずれにしろ、簡単には見ることができない幻の滝です。

若い頃に崖を素手で降り、また、登ったことがあるという、古地東の話によりますと、高さが大凡 20m の滝の二段滝で、渓谷が狭く深いために、昼なお暗き、稀に見る珍しい滝だそうです。また、隣の、小沢の滝も、二段の滝で、これまた珍しい滝で、合流地点に並んであることも含め、素晴らしい景観だそうです。

57-2【強瀬ヶ滝橋の付近】

さて、滝とは反対の上流側には、昔の道がありました。右の写真の白いガードレールは、現在の強瀬ヶ滝橋です。写真にも認められるように、現在の道は真っすぐに県道と交わっていますが、昔は、写真に「岩を削った部分」と示した所に、高山の岩が張り出していたため、昔の道は、岩の張り出しを回り道して、現在の道路より 4m 位左側を通っていたそうです。また、昔の強瀬ヶ滝橋は、もう少し上流の低い位置にありましたので、赤破線で示したように、崖側の狭く（馬がやっと通れる位の 1.2m 位の幅）急な坂道を通らなければなりませんでした。ですから馬も難儀し、ここで亡くなった馬もいたそうです。写真の赤丸付近に馬頭観音を祀ってあったそうですが、いつのまにか無くなってしまったそうです。崩れ落ちたのではないかと思われています。

右の写真は、上流側から、強瀬ヶ滝橋を写した写真です。写真中央右側に、大きな丸い岩が写っています。ここを足場にして、以前の橋を架けていたそうです。丸太の橋です。大水が出ると流されてしまうので、その都

度、作り直していたそうです。その昔の丸木橋よりも、少し上流側に、水車小屋がありました。

57-3【強瀬ヶ滝の水車小屋跡】

強瀬ヶ滝の水車小屋は、大水になると、しばしば被害を受けたので、宮の沢に移転したことは､既に述べました。

右の写真は、水車小屋があった処から、上流を写した写真です。右側の岩に空いている円形の穴は、水車小屋の構造物を支えるための丸太を固定するために開

けたものだそうです。

57-4【風光明媚】

この強瀬ヶ滝橋付近は、渓谷の中に、滝があり、水車小屋があり、また今は無いですが、近くに田圃もあって、景色がとても良かったそうです。今でも十分に風光明媚な処です（下右写真)。同じところを、強瀬ヶ滝橋より写しましたのが下左の写真です。景色が良いですよね。ここも地域起こしに使える一要素だと思っています。

58. 古地東**住宅**

次頁の写真はの住宅です。今は空地になっている大東から写しています。三階建ての大きな家です。古地東は、強瀬ヶ滝に最初に住みついたそうです。お寺さんが火災にあい、過去帳が焼失してしまったので、それが何時頃なのかは不明ですが、古文書から、少なくとも小山田信茂時代には、有力百姓として存在していたことは確かです。

現在の住宅は明治 25 年に建替えたもので、その後、何回かの内部の改造を行っているそうです。以前には、玄関に大戸があり、普段は小さなくぐり戸から出入りし、大戸は夕方に

なり、馬を入れる時に、開いて入れていたそうです。夜間に馬を外に置くと、狼に襲われてしまうため、家の中に馬小屋があった、ためだそうです。また、お蚕を飼っていた家では、桑の葉を籠いっぱいに背負って、家に入る時にも、大戸を開けたそうです。また、昔の農家の造りは、どこでも、そうなっていたと思いますが、入口から裏口まで、土間が真っすぐに続いていました。古地東の土間は、結構広い土間で、子供の頃、その土間で、自転車乗りの練習をしたことを覚えているそうです。

【１階の部屋】

右の写真は建物内部の写真です。十畳から八畳敷きの座敷が三部屋続いています。奥の座敷は仏間です。ここには、年代物の立派な仏壇（一間仏壇）もありました。もっとも、仏壇を飾っていた装飾品は、先の大戦の時の貴金属提出に協力したので、ありませんでした。それにしても、黒光りする梁や柱が、歴史を感じさせてくれます。

以前には蚕を育てていたという 2 階から上の部屋も見せて頂きました。

【２階】

右の写真は２階です。奥に見える梯子を上ると３階です。2 階は一部（写真とは反対側）、子供部屋３部屋（大工依頼）の他は、物置として使っているそうです。後程その一部を紹介しますが、珍しいものが沢山ありました。

【３階】

下の写真は３階です。奥にある梯子を上ると４階に行くことができます。３階も物置として使用しており、中の写真に示す“横引きの鋸”など、珍しいものがありました。

【４階】

右の写真は４階部分です。ここは建物の構造が良く分かります。前頁の３階の写真にも写っていましたが、二本の梲（うだつ≒大黒柱）が写っています。「うだつが上がらない」の“うだつ”です。梲が二本もあるのは珍しいものです。

また、中の写真に示すように、両側の妻壁は“鷹の羽づくり”になっており、梲と共に棟木を支えています。

この４階にも珍しいものがありました。“ケタ箱”です（下左の写真）。ケタ箱は、水車小屋でひいた粉を、家で篩い分ける道具だそうです。大きさは、長さ 70～80cm、横 30cm、高さ 35cm 程です。粉篩のやり方は、下写真の中と右に示す“絹ぶるい”に、水車小屋でひいた粉を入れ、ケタ箱にセットし、絹ぶるいの取っ手を握り、ガタッン、ガタッンと音がするように、勢いよく前後に引いて、絹ぶるいをケタ箱にぶつけるようにします。

他にも、2 階や屋外に紹介しきれないほどの珍しいものが沢山あるそうです。甲府に引っ越した後では、見せてもらうことも簡単にはできなくなってしまいますので、お願いして、そのほんの一部を見せて頂きました。1 つずつ説明すると、大変な文量になってしまいますので、写真中心に簡単に紹介します。

①は焼酎瓶です。一斗(18ℓ) 用の瓶だそうです。

②は酒を発酵させて作るための瓶だそうです。

③は酒屋から量り売りで買ってくるときの瓶だそうです。酒店の名前入りです

④は葛籠です。説明の必要ないですね。

⑤は羊鋏です。自宅で飼育していた羊の毛を、この鋏で刈り取り、紡いで、純毛の背広をつくり、成人式に着ていったそうです。

① 焼酎瓶

② 酒発酵用の瓶

③ 量り売り用の瓶

④ 葛籠

⑤ 羊鋏

⑥は蚕部屋を暖めるための暖房具だそうです。上の鉄皿で木炭を焚きます。その熱が床に直接伝わらないために、下の受けがあるのだそうです。

⑦は茶缶です。自宅で栽培した茶葉を、焙煎し、保管しておく缶だそうです。

⑧はカンテラです。これも説明の必要はないですね。

⑨は糸車です。これも説明の必要はないですね。

⑨ 糸車

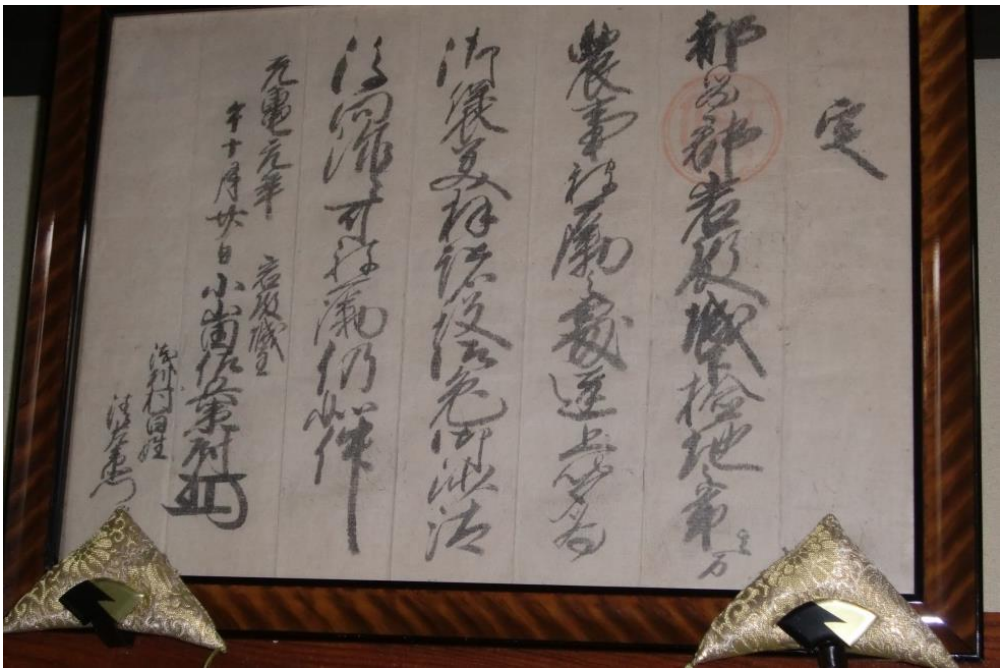
⑥ 蚕部屋の暖房具

⑦ 茶缶

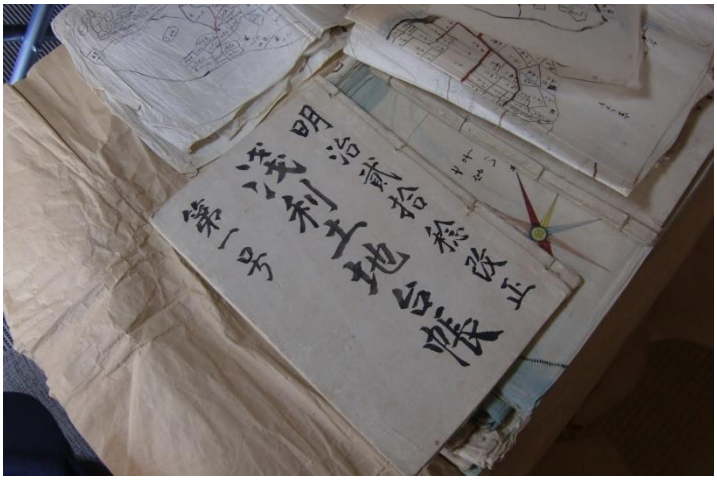
⑧ カンテラ

59-1【古地東の古文書】

古地東にも古文書があります。次頁の写真は、岩殿城主、小山田信茂から古地東の先祖が頂いた感謝状だそうです。元亀元年ですから 1570 年で、今から、450 年ほど前になります。少なくともその当時から、古地東は浅利村の有力百姓として住んでいたことを、この古文書が証明しています。因みに、1570 年の前年の 1569 年には浅利信種公が戦死した三増峠の戦いがありました。また 2 年後の 1572 年には三方ヶ原の戦いがあり、信玄公が病没した年でもありました。



古地東には、他にも古文書が多くあります。下の写真は、おじいさん、賑岡村の村会議員をしていた百太郎氏が作成した「浅利土地台帳」だそうです。百太郎じいさんが、私財を散じて測量士を雇い作成したものだそうです。土地台帳を作成するためには、実際に土地を歩いて測量し（右写真がその地図）、それを整理して、大きな地図を作成します。その完成した地図から、土地の所有者を加えた土地台帳をつくることになるそうです。大変な仕事になりますが、浅利地区全体の土地台帳があり、多くの人が借りにきて利用していたそ



うです。そのように、百太郎おじいさんは、地域のために尽くす人でしたが、同時に資産家でもあったためにできたことでもありました。明治になり、国民に初めて選挙権が与えられた時、最初は、一定の納税額以上の男子にだけ与えられたものです。当時の浅利では4軒だけしか、投票権を与えられた人は、いなかったそうです。その一人が百太郎じいさんだったそうです。

1889年（明治22）衆議院議員選挙法公布
選挙権者「直接国税（地租・所得税など）を15円以上納める満25歳以上の男子（被選挙権は30歳）に限る」（それは概ね、2～3ha以上の田畑を有する中程度の地主や豪農たち）

1890年（明治23）の第一回総選挙
有権者：45万人余（全人口4,000万人の1.1％強）

（ホームページ「日本史大歳時記　出来事カレンダー」より、一部加工）

59-2【古地東の屋敷神さま】

古地東の屋敷神さまは「妙見さま」です。祠もありますが、ご神体は、神棚に飾っています。妙見さまが屋敷神さまになった謂れは、以下の様に伝えられているということです。

古地東の代々の子孫は、女子は多く生まれるものの、男子が非常に少なかったそうです。その結果、少なくとも戦国時代から続く豪農であったにも関わらず、また、親戚は多いにもかかわらず、分家が殆ど無いという結果になっているそうです。婿を迎えたことも、何度か、あったそうです。そこで、能力者に見てもらったところ、妙見さまを祀れば良いことが分かり、それ以来、祀っているそうです。「妙見」＝「女を少なく見る」＝「男子が増える」ということだそうです。その霊験はあらたかで、進氏の曽祖父の新左衛門氏には二人の男子が授かったそうです。長男の百太郎氏と二男の林作氏です。しかし、その林作氏は、最終的に都留に出てしまったそうで、結果的に、大月には分家はないそうです。

58-3【縄文の石皿】

右の写真は縄文時代の石器（石皿）です。庭に置いてある間に苔が生えてしまったそうです。この石皿は、古地東の先祖が、風来戸（ふりゃーど）で、「やしきびき」を行った際に、出土したものだそうです。「やしきびきと」は、土地を平らにするために、高い所を削って、低い所に埋める作業を行う時に、土を投げたり運んだりするのではなく、土を載せた運搬具を引いて移動させるので、この名称になったのだそうです。写真の石皿と一緒に石棒（磨石？）も出土したそうですが、いつのまにか無くなってしまったそうです。石質は溶岩です。50cm 程の大きさです。

『大月市史』によりますと、磨石・凹石・石皿は「木の実類を割ったり、つぶしたりするときに使われた道具であり、この時代（縄文中期）に集中して認められる」ものだそうです。

58-4【古地東の金木犀】

写真中央に見えるのが、古地東の金木犀です。少なくとも大月市でもっとも大きな金木犀の大樹です。地上 50cm の幹回りが 164cm ありました。昔、御座松や千本松が大月市の天然記念物に指定されるときに、この金木犀も指定の話があったそうです。しかし、指定されると、枝一本切るのも難しくなるので、反対し、指定を受けなかったそうです。というのは、樹勢が良く、枝がどんどん伸び、屋根の上にかぶさり、トタンを腐らせてしまうので、定期的に剪定をする必要があったからです。この金木犀は、古地東のおじいさん百太郎氏が購入した物だそうです。百太郎おじいさんは、絹糸と絹織物の仲買を商売にしていた関係で、いろいろな土地を廻っていたそうです。また、趣味が植物ということで、いろいろ珍しいものを求めては集めていたそうです。この金木犀も、そのようにして集めたものの一つだそうです。

ところで、屋号の「古地東」ですが、おもしろい謂れを聞

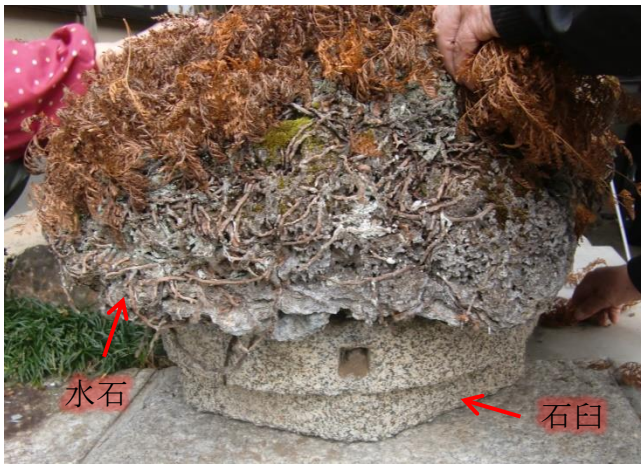
きました。もともとは、単に「東」だったそうです。ところが、入組には、ここの強瀬ヶ滝の他に、現在の「岩下」も「東」といっていたそうです。あるとき、岩下のおばあさんが、強瀬ヶ滝の「東」に来て、「あっちの東から、こっちの東に来ました」と言ったそうです。そこで、同じ「東」が二軒あるのも紛らわしいので、「こっちの東」を洒落て、「古地東」に変えたということです。面白いですね。ちなみに、入組には「大東」という屋号もあります。その謂れは、「大東」は元々、強瀬ヶ滝の、まだ「東」といっていた頃の、加藤氏宅の東に住んでいたのだそうです。ですから、「東」のさらに東、ということで「大東」という屋号になったのだそうです。

58-5【分かりますか、これは何？】

上の写真が何か分かりますか？　石臼ではないです。水鉢でもないです。先述の縄文の石皿でもないです。大きさは直径 39cm、裏側に高さ 4cm の足が三個付いています。材質は御影石です。

答えは“燭台”だそうです。でも、そう聞いても“？”ですよね。まだ蝋燭が無かった頃（つまり、行燈も提灯も無かった頃）に、この燭台の上で松明を燃やして、室内の灯りを取ったものだそうです。何時頃まで使用していたのかは分からないそうです。とにかく、古いものだそうです。

58-6【水石（すいせき）】



前頁下の写真と、上の写真は古地東の玄関前にある水垢でできた岩、水石（すいせき）です。それも、お店で購入したものではなく、浅利川（遅能戸）で採取したものだそうです。水石は、鍾乳洞と似たメカニズムで生成されるものだそうです。特定の沢だけで生成されるそうです。

58-7【蔵】

右の写真は古地東の蔵です。右側が味噌と漬物の専用の蔵で、左側が穀蔵です。今は、蔵のある家自体が少ないですが、この様に大きな蔵は、さらに少ないのではないかと思いました。

58-8【進氏の趣味】

道具小屋もありました。刈払機や噴霧器等も、それぞれ複数台ありましたが、旋盤やボール盤・溶接機をはじめとする、各種の工作機類や大工道具なども、専門家さえ持っていないような道具類まであるそうです。というのは、進氏の趣味は、物を作ることだそうで、この道具小屋は勿論のこと、車庫も、客間の天井や床など、殆どのものを自分で作ったそうです。木材を加工するだけでなく、コンクリートで自家水道の水槽や、車庫の鉄骨なども自分で切断・溶接し、組み立てたそうです。

これまでも、アルバイトで大工や建設工事をしたこともあり、関連する、クレーンや特殊機械、それに玉掛などの資格なども取得しているそうです。また、定年退職後は、便利屋になろうと考えて、家屋工事技師の資格も取得したそうですが、腰椎の病気が発症したため、断念したとのことです。

59. 強瀬ヶ滝の大屋

右の写真は、強瀬ヶ滝の大屋の屋敷です。現在は、空家になっています。左端の二階に上る梯子は、お蚕を飼っていた二階に、外から直接行くためのものだそうです。隣の、同じく空家になっている「三共」の屋敷にも、同じ目的の、梯子がありました。

60. 強瀬ヶ滝の畑

強瀬ヶ滝の住宅の裏側（山側）は畑です。それも、結構広い畑です。昔は、丸の尾根のすぐ下の“丸”という所まで畑が続いていたそうです。日当たりが良いため、古くから人が住みついた場所のようです。

61. 強瀬ヶ滝の共同墓地

写真は強瀬ヶ滝の共同墓地です。この地域でも、昔は各屋敷内に死者を埋葬していたそうです。屋敷内に埋葬していたのは、狼に掘り返されてしまうのを防止するためだったそうです。

昭和初期頃だと思いますが、政府の「不衛生だ」という達しで、共同墓地をつくることになり、強瀬ヶ滝地域も、ここに、共同墓地を造ったのだそうです。

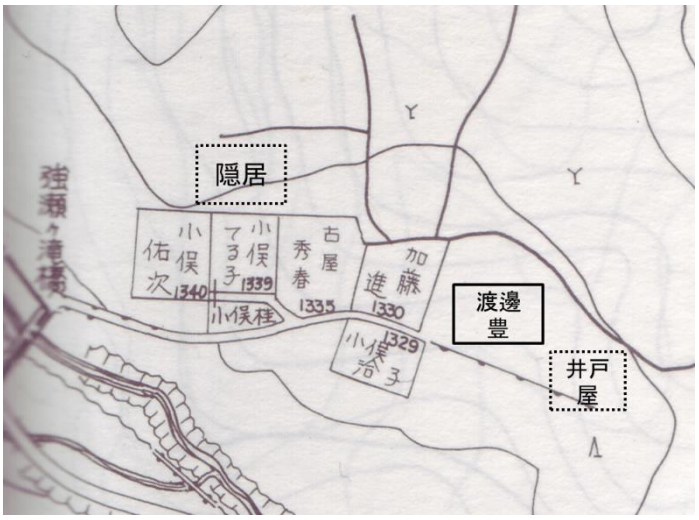
63. お薬師さま

上の写真はお薬師様です。お薬師様のお祭りは、昔は1月13日に行っていましたが、今は13日に近い日曜日に行っています。お昼に行います。当番は、これも昔は強瀬ヶ滝の住民で廻していましたが、今は入組役員で廻しているそうです。浄照寺のお寺さんが来て、お経をあげ、その後に、当番の家で作った手料理を御馳走に、お酒を飲んで、祀ります。現在、お薬師さまは、東屋内に安置されていますが、昭和の頃までは、畳が八畳もある、立派なお堂内に安置されていたそうです。そのお堂が古くなり、平成元年に、再建の話が出た時に「畳

があると、いつ迄も長居をして困る」という意見も出たりしたそうです。それが原因というわけではないでしょうが、現在は畳の無い東屋になっています。また、東屋に建替えた時に、祠と御神体も新しいものに換えたそうです。古い御神体は浄照寺で保管しているそうです。

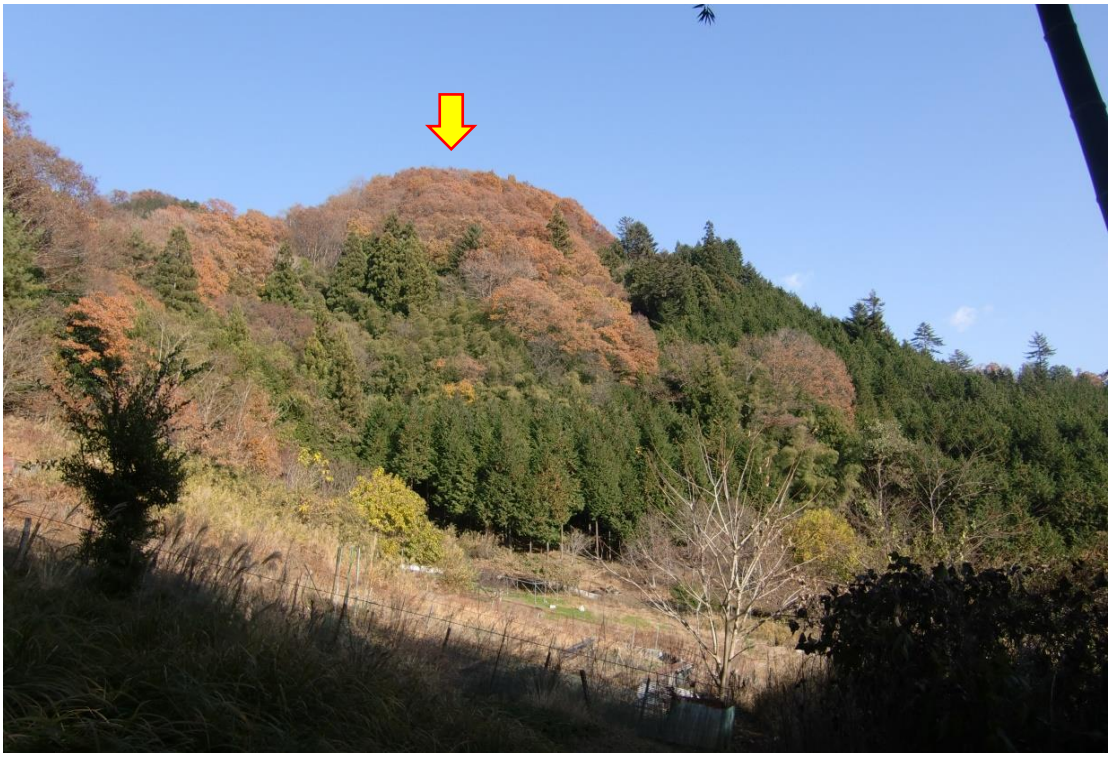
63. 過疎化が進む強瀬ヶ滝地域

強瀬ヶ滝集落は、古い伝統ある集落ですが、ここでも、過疎化が進んでいます。最盛期には、「東（古地東）」「大東」「井戸屋」、「中」「大屋」「隠居」「三共」「小俣桂」「下」、そして、一時、加藤家の分家の林作氏の家も有ったそうですから、都合 10 軒あったことになります。それが、現在（平成 30 年）、人が住んでいるのは 2 軒だけです。そして、古地東も今年中に引越し予定ですので、だけになってしまいます。



64. お天狗（てんごう）松

今は無いですが、古地東の裏山の頂上にあった松の大樹を、お天狗（てんごう）松と呼んでいたそうです。また、麓の畑も「お天狗松」と呼んでいるそうです。よく民話や伝承には「天狗松」が出てきて、そこでは、枝一本でさえ伐ったりすると、その切った人間は勿論のこと、木を運んだ馬にさえ祟りをなす、ということが一般的ですが、ここの天狗松には、そのような祟りの伝承は無いそうです。松も自然に枯れたそうです。但し、子供達が夕方おそくまで遊んでいたり、夜泣きをしたり、悪さをして言うことをきかなかったりすると、「天狗様にさらわれるぞ！」と、言われては、いたそうです。



天狗松の謂れは、お山のてっぺんにある松で、その木に登ったなら、さぞかし見晴らしが良いだろうとい

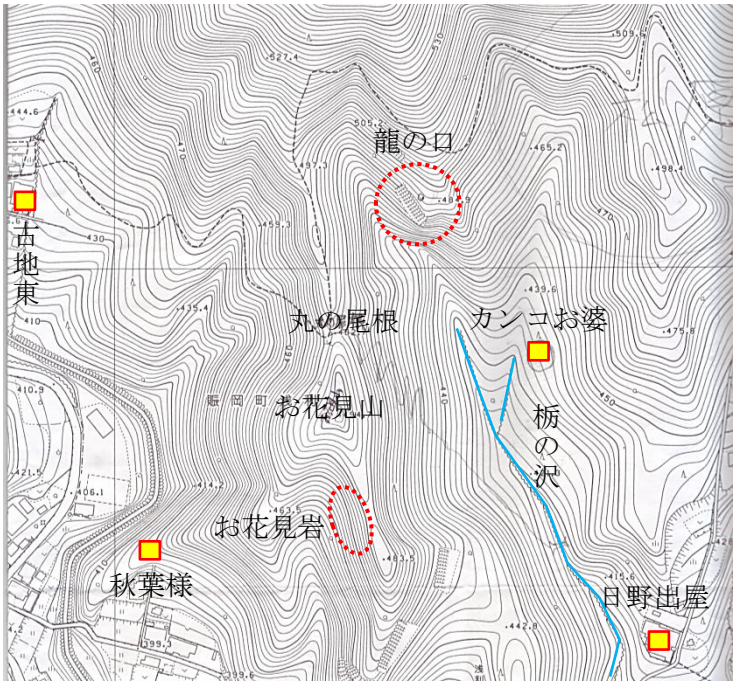
うことから、天狗様がいたなら、きっと飛んで来るだろうと、いうことで、名付けたのではないかということです。

また、お天狗松の頂きに、今となっては謂れが不明ですが、河原の大石があるそうです。この山の頂は、岩殿山と同じ、特徴ある丸い小石で出来ている岩殿山礫岩層ですが、それらの小石とは明瞭に大きさも形も異なる大石で、誰かが運び上げたものと推測されたそうです。この大石が、何かの祠の土台に使ったものなのか、記念碑的な物の一部なのか、全く不明だそうです。また、これと同じ河原の石が、お花見山の山頂にもあるそうです（加藤進氏談、「お花見山」の項も参照）。

65. 龍（瀧：たつ）の口

右の地図に龍の口の位置を示します。龍の口は、江戸時代の古絵図（1 頁、12 頁写真参照）にも記載のある地名で、岩場にある洞窟だそうです。幅 5m、高さ 2m 程度の洞窟で、内部にはコウモリが棲んでいたそうです。この洞窟には、横側に別の穴が幾つかあり、なかには、丁度、熊が冬眠に使うような大きさの穴もあるそうです。（加藤進氏談）

龍の口の写真を撮ろうと、二回程挑戦したのですが……。次報をご期待下さい。



66. お花見山

お花見山を右の写真に示します。ここからの景色は、名前の通り、大変に良い所だそうです。

右の写真は平成31年1月29日の調査時の、お花見山山頂の写真です。

写真に認められるように、古地東の話の通りに河原の石と思われる石が3個、確認することができました。探せば、まだ有るのかもしれません。

また、意味不明のサークルが、少なくとも2個ありました。

そのサークルは、周囲より明瞭高くなっており、その内側は逆に若干低くなっています。サークル自体は硬く、盛土した物とは思われません。

この、お花見山山頂は、ミステリーゾーンかもしれない、と思われました。

67. お花見岩

お花見岩の山頂から、左側の尾根道を少し先に進んだ処、その右側の崖がお花見岩です。右の尾根道を進むと、秋葉様が麓にある山に至ります。冬期で落葉樹の葉がないためでしょう、正面に広野屋（渡邊芳彦氏）宅がみえましたし、遠くに大屏風・小屏風、幕岩も綺麗に見えました。また、左側には、旧浅利小学校跡の森の都や砂防ダムが見えました。

このお花見岩は、子供の頃、近所の仲間同士で誘い合って良く登ったと、また土橋が持ってきた甘酒は美味しかったなあと、西が思い出してくれました。

68. 丸の尾根

強瀬ヶ滝から山道に入り、尾根道に出た処が丸の尾根です。尾根道を右に行けば、お花見山へ、左に行けば、松原から、日野出屋や山の神様に至ることができます。

その尾根道を左に曲がって、少し進んだ処は岩山になっていて、視界が開けた景勝地です。大屏風・小屏風が、視界を遮るものが無く、非常に良く見えました。

写真左の大屏風は、猿の顔の様に見えますし、右の小屏風は埴輪の顔の様に見えます。埴輪の口の部分は、かなり大きな洞窟かもしれないと思い、“埴輪の口”という名称を考えてみました。

69. いた穴

江戸時代の古絵図（1 頁、12 頁の写真参照）を見ると、強瀬ヶ滝の遅能戸側に「いた穴」の地名が記載されています。残念ながら、ここも未確認の状態にあります。次回以降に、乞うご期待を。

70. ムジナ穴（２）

ムジナの重平と呼ばれている猟師のお爺さんがいて、狸の毛皮を売る商売をしていたそうです。古地東（加藤進氏）の裏山にもムジナ穴があって、その穴で良くムジナを捕っていたそうです。その方法とは、ムジナ穴の入口で、杉葉や山椒を加えた火を燻し、穴の中にいる

ムジナを燻し出す方法だったそうです。ムジナも穴の中で、我慢しているのだそうですが、いよいよ耐え切れなくなり、ヨタヨタと出てきた処を、叩いて捕まえるのだそうです。また、ムジナ穴を蓋っていた岩がズレたせいか、燻した煙が奥の穴の上から出るようになり、そこから逃げられたことがあったそうです。そこで、その煙の出口に罠をしかけることにしたそうです。煙穴の出口に仕掛けを作り、その仕掛けにムジナの頭が触れたなら、仕掛けよりも少し深い所に設置した捕獲輪が、ムジナの胴体を締め付けるように、枝を弓なりに曲げた装置を作っていたそうです。先述のフリャードのムジナ穴の他、入組には、他にも幾つかの、よくムジナが住みつくムジナ穴があるそうです。

71. お天神様

旧浅利小学校の裏山に、お天神様が居られます。年が改まった、平成 31 年 1 月 29 日に調査とご参拝をしてきました。

お天神様の祠は存在していました。しかし、細い樹木や笹などが繁茂して可哀そうな状態でした。祠の周囲だけ伐採して、調査を始めました。祠は、結構手の込んだ立派な作りのものでしたが、破損が目立ちました。例えば、屋根の庇が折れていましたし、四隅の台柱も、左側の二つが無くなっており、左奥は後から生えてきた樹木にもたれることで、やっと姿勢を保っているような状態でした。回廊も、正面右の欄干のみが残っている状態でした。

また、祠内には御神体でしょうか、次頁写真に示す棟札？が入っていました。正面に「天満大神」の文字が、裏面に「昭和四十六年四月吉日」の文字が、それぞれ記載されていました。

四月と言えば、新入生が入学してきて、新学期が始まる時期です。子供たちの健康と、賢

い子に育つように、お守りくださいと、お祈りしたものだろうと推測されました。

浅利小学校が、東小に統合されて無くなり、お天神様も、役割を終えた安堵感と共に、眠りについておられるようでもあり、また、下組の天神様の元へ、お帰りになられたようでもありました。

調査も終わり、お米と塩とお酒をお供えし、二礼・二伯・一礼で参拝しました。そして、御神酒を頂いて帰りました。